



## 作曲家、指揮者、オペラ座総督として活躍する ウド・ツィンマーマン

中田千穂子 (音楽評論家/ベルリン在住)  
Text by Chihoko Nakata

### 75年目を迎えた「白バラ」

真の自由を求めて「白バラ」抵抗運動を行い、ナチの理不尽な裁判によってミュンヘン大学の学生3人——ゾフィー・ショル(21)、ハンス・ショル(24)、クリストフ・プロープスト(23)——が断頭台で処刑された日からちょうど75年経った2018年2月22日、ドイツのZDF/ARDテレビ放送は、正義を貫いた勇敢な若者たちに賞賛の言葉を惜しみなく贈った。ミュンヘンの「白バラ」財団では追悼コンサートが催され、ドイツのアルテンブルク・ゲラ劇場ではウド・ツィンマーマンの室内オペラ《白いバラ》が上演され、多くの聴衆に深い感動を与えた。

ウド・ツィンマーマン(1943～)はこの公演プログラムの中で、筋書きの無いこのオペラを「内面的な進行」と記している。「私の心を捉えるのは、ファシズムを克服する問題よりも我々がいかに真実を見抜くかということだ。かつて自分がこのような状況に置かれていたなら、どうしたであろうか？ そして現在、果敢な実

行と日和見主義的な考えの間で、及び腰の我々はどうすべきか？ 自分の判断が正しいかどうかを常に吟味し、個人的な責任を感じた上で、やっと真実を見抜くことができる」と。

この音楽は様々な色彩を放ちながら、絶叫と永遠の沈黙の間で彷徨を続けてゆく。1986年2月にハンブルク州立歌劇場のオペラ・スタービレで初演され大成功を博して以来、室内オペラ《白いバラ》は東西ドイツはもとよりイスラエルやアメリカでも取り上げられ、最も多く上演される現代音楽作品の一つとなった。

現在生きているドイツ人も日本人も、第二次世界大戦中に犯された罪の共犯者ではない。しかしながら、全ての国民には、残虐的な犯罪が二度と繰り返されないように努める責任がある。そして、この意思を次世代に伝えていくことも現在に生きている我々に共通する課題だ。この観点からも、この度東京交響楽団により《白いバラ》が日本初演される意義は大きいと考える。

作曲家、指揮者、オペラ座総督として活躍する ウド・ツィンマーマン

## ムジークテアターのスペシャリスト

「劇と音楽が最も私の性に合っていると思う。劇は音楽により融合され、音楽は演劇を融合し、一体となる」と述べているように、ツィンマーマンの着眼点はムジークテアター、つまり音楽劇にあるようだ。彼の独創的なオペラ《**第2の決定**》(1970)、《**レーヴィンの水車小屋**》(1973)、《**シューファーと空を飛ぶ王女**》(1976)、《**素晴らしき靴屋の女房**》(1982)は、《**白いバラ**》(1968/1986)と同様にドイツ内外のオペラ座でしばしば上演されてきた。

また、ベルリン・フィルが創立100周年を迎えた1982年には、カラヤンから委嘱を受けて、**混声合唱、ソリ、大オーケストラのための《パクス・クエストゥオーザ》(嘆願する平和)**を作曲。現実性と歴史的側面から、我々の現代の生活の問題や芸術を存続させるための決定的な質問のテーマを展開すべく、アッシジと20世紀のドイツ語圏の作家たちのテキスト、バッハの《口短調ミサ》の引用や12音音列を用いたこの曲は、ベルティーニの指揮で初演され、絶賛を博した。

同年の**ソプラノとフルートとピアノあるいは室内オーケストラのための《ヒロシマという時**》(1982)は、筆者がドレスデンの世界平和音楽祭でツィンマーマンのピアノ伴奏で歌い、初演した。〈折りづる〉〈原爆で死んだ幸子さん〉〈ヒロシマのみどり〉のテキストは、原爆詩人・栗原

貞子の詩を基に故レオ・ベルク(音楽評論家で筆者の主人)がドイツ語で書いたもので、ツィンマーマンの閃きに溢れた劇的な音楽が聴く者の心を捉えてやまない素晴らしい詩歌だ。ソニーからは中田千穂子(ソプラノ)、カールハインツ・ツェラー(フルート)、チプリアン・カトサリス(ピアノ)の演奏でCDもリリースされている。

## ライブツィヒ歌劇場の総督として

ツィンマーマンは1984年から指揮者としての活動を開始し、ヨーロッパの主要なオーケストラのほか、ウィーン、ハンブルク、ミュンヘン、ボンのオペラ座の客演指揮を行ってきた。世界的な活躍を続けながらも常に故郷を愛し、ドレスデン国立歌劇場(現・ザクセン州立歌劇場)のドラマトウルクやドレスデンのカール・マリア・フォン・ウェーバー音楽大学作曲科の教授としても知られた。

そんなツィンマーマンの夢は、再建されたドレスデン国立歌劇場の総監督に就任することだった。しかし、1984年に東独政府に出願したものの、幹部からの承諾は得られなかった。

その後、彼は1990年3月に、世界初の市民階級が自主経営するオペラ座として300年の歴史を誇るライブツィヒ歌劇場の総督に就任。作曲家で指揮者でありながら、突如956名の従業員を抱える「芸術管理人」となる。



ツィンマーマンの作品を取り上げる  
ムジカ・ヴィヴァ・アンサンブル・ドレスデンと筆者

ライブツィヒには現代オペラの大きな伝統がある。彼は現代のミュージクテアターをプログラムのメインに置いて、シュトックハウゼンやカーゲルを招いて作曲家自らの指揮によるオペラ上演を企画。1993年にはリゲティのオペラ《ル・グラン・マカーブル》やマデルナのオペラ《サティリコン》等のプルミエ上演により、ライブツィヒ歌劇場は批評家たちに「その年のオペラ座」に選ばれた。

同年、EUが発足した頃、ツィンマーマンは「芸術家の責務」について語っている。「社会がどんどんグローバル化し、我々の精神的な面が失われつつある今、芸術と総括的な文化が何を意味しているかを明確にしなければならない。それは物質的なことではなく大変内面的な、人間相互間の問題である。民族を相互に結び付けるための対話を聴衆に呼びかけ、芸術を通して物理的かつ精神的な体験を可能とすることは我々に与えられた最も素晴らしい責務である」と。

1996年からの4年間、彼がザクセン州政府評議会会長(CDU)を務めたのは、

文化が経済に大きく依存していることが心配でたまらなかったからだろう。

## 21世紀のツィンマーマンの歩み

2001年に総督を辞任するまでにツィンマーマンがライブツィヒで初演したオペラは、27作品に上る。お別れ公演では自身のオペラ《レーヴィンの水車小屋》がキルヒナーの演出で上演され、聴衆から惜しめない拍手がおくられた。その次の3年間は、ベルリン・ドイツ・オペラの総監督としても活躍した。

さらにツィンマーマンは、オペラと並行して現代音楽の発展にも精力を注ぐ。彼はかつて現代音楽の探求と実践の場としてドレスデン現代音楽センターを創設したが、2004年には新たにヘレラウに劇場、バレエ、建築、造形芸術とメディア芸術を統合したヨーロッパ芸術センターを創立し、総監督を2008年まで務めた。

放送の分野でも、ミュンヘンで戦後すぐから続くコンサート・シリーズ『ムジカ・ヴィヴァ』の芸術監督に1997年に就任。2011年まで14年続いた芸術監督時代の最後のコンサートでは、バイエルン放送局より金メダルが授与されたのだった。

現在は闘病中のツィンマーマン氏の一日も早い回復を念じてやまない。

第660回 定期演奏会 5月26日(土) 6:00p.m. サントリーホール

指揮:飯森範親 ソプラノ:角田祐子 バリトン:クリスティアン・ミールド

ハンツェ:交響的侵略~マラ톤の墓の上で~

ウド・ツィンマーマン:歌劇「白いバラ」(演奏会形式/字幕付/日本初演)